

# 第一部 跡見花蹊の創意



花蹊の素描画より



# 跡見学校開校前史

## 1 跡見家

跡見―伝説に拠れば跡見赤橋の後裔也。赤橋は天穗子命の裔にして、用明天皇の朝聖徳太子に随ひ、稻城を築きて拠れる法敵守屋大連を射殺し、同太子の四天王寺を建立せられし時木津浦に來り住す。二十七世跡見重房の二男資重、天台の門に入り、三十三世跡見治郎右衛門光重に至り蓮如上人に謁し真宗に帰依すと云ふ。其の後裔唯專寺の住職也。摂津の名家とす。(太田亮『姓氏家系大辞典』)

『跡見花蹊先生実伝 花の下みち』に載せる「跡見家の系図」以来、ほぼこの説を採っている。

模糊たる伝承の世界の系図ではあるが、諸書をあさっている中で、花蹊の母方の寺田家と跡見家とは、遠祖と中祖を共にし、相互に縁組をしてきた間柄でもあったとのこと。また、跡見花蹊や跡

見女学校の評判が拡がるにつれて、「同姓」の縁故を尋ねる中に、遠州湖西市に住んでいた跡見氏が「赤橋より三十数代、連綿として医を業とし」て、京都に住んでいた梅仙は法橋の位を授けられ、親王家の医役を勤めるほどであった。その後、梅仙は不運な事件があり、京都を離れ尾張一ノ宮に住んだという。その子孫が遠州白須賀在に住み、一族さらに分かれて主として医業を営み繁栄しているという。なかには医を適塾に学んだ者や、国学を学び平田篤胤の門人になり花蹊と同じ「教導職訓導」に就いた人もあるという(『湖西市を築いた人びと』湖西市)。

## 2 若き日の跡見花蹊

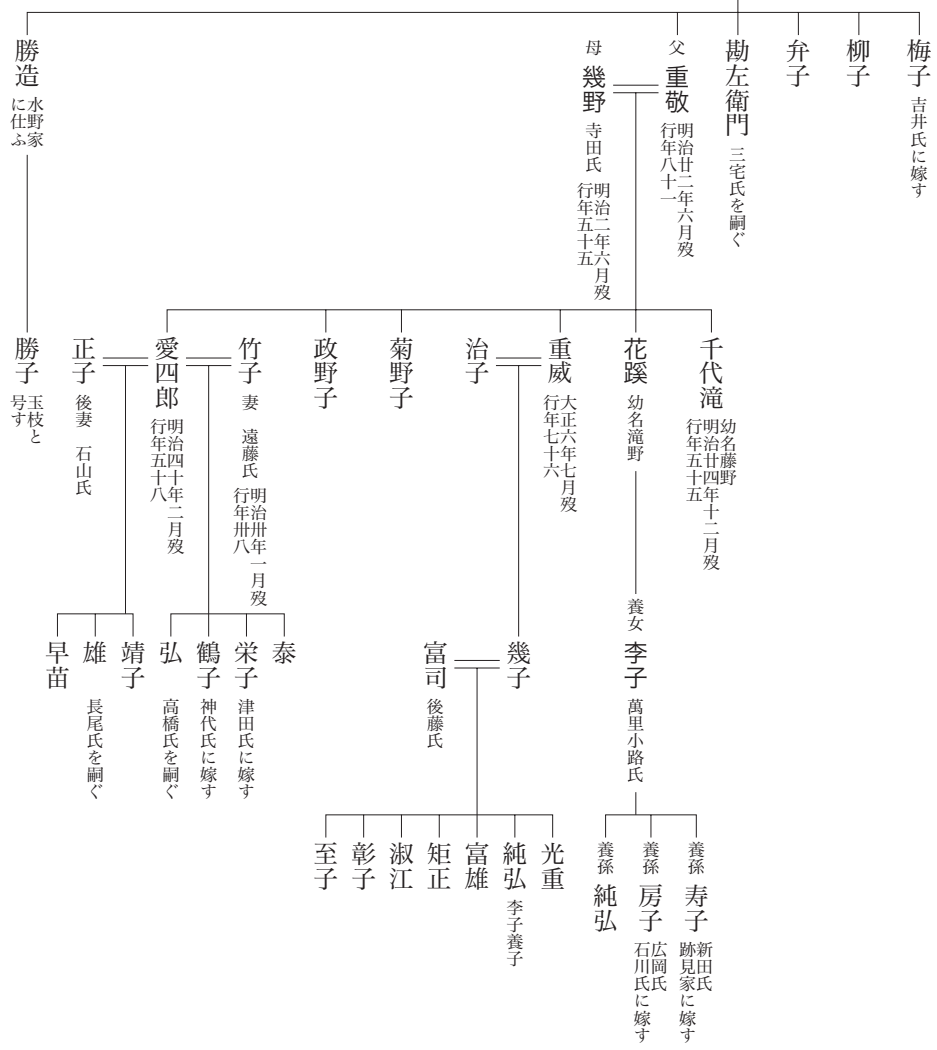
家は大阪木津の大庄屋でございますが、私の生れました時はもう庄屋でもなく、家の財宝は悉く人手に渡して、……大分困難な時でございました。……父は庄屋をやめて手習の

跡見家略系譜

天種子命  
 跡見赤檮とみのいちい  
 用明天皇の朝に仕ふ

第卅三世  
 祖 治郎右衛門光重

第八十一世  
 父 三右衛門





師匠を初めた時分に、私が生れ、……姉も一人でございましたし、弟たちも殖えて……、中々人形を抱いて遊ぶといふ訳には参りませんでした、……私が幼い時から、物覚えがよいと云ふので、父や母が種々教へもいたしましたし、自分も好きであつたと見えて、書を読んだり、字を書いたりして居る事が多く、又さうするものだと思つて居たのでございます。

父の処へ習ひに参る弟子は、九月からは百姓が暇になりますので、秋から正月へかけて百二十人計、皆大人の農夫でございます。夜になりますと、此だけの弟子がそろく習ひに参るのですが、父は逐一教へて居られませんでしたから、姉と私と二人で代稽古を致します。習うものは、名頭、屋号、畑の名杯で、仮名も交じつたお手本を見せては、何処と何処へ力を入れて斯う引くのだと、字を逆に書いては直して見せてやる。今日迄、私は学校で、生徒の見よい様に、さかさに立万なんか書いて見せてやりますが、こんな小さな時分から、逆に書く事は慣れて居たのでございま

す。……暮六つから八時頃までは此の大人の字を直すのが役でございました。昼間午前中子供の弟子に、算術と、実語経、児童経、女大学、女庭訓杯を教へまして、其間には、弟の守も致します。夕方になりますと、油掃除をして灯心を揃へ、夜学の始まる百畳計りの処へ、自在鍵を下げて土器を置き、其の両方へ百姓達が坐つて、稽古の出来る様に、きちんとして置かねばなりません。毎日こんな風でしたから、別に何とも思ひませんで、何時も正月の八日の稽古初めから、この通りにして居りました。

(花蹊『女の道』)

両親がよく申しますには、跡見家は不幸にして没落して居る。誠に残念なことである。お前は女ながら奮発して跡見家を盛立てねばならぬ、実に跡見家再興の任は、お前の肩に掛かつて居るのだといふやうなことを繰り返しますので、私は幼心にも大に感激し、ゆくゆくは屹度さうなりたいたいものであると、深く思つて居ました。

(同)



花蹊にとつて、教えることと学ぶことはつまり啖啄同機ともいうべき呼吸だったのかもしれない。しかも、両親の期待を一身になつての物学びは一二歳で、円山派の画家石垣東山に入門、ついで楨野楚山、一七歳の京都遊学に際しては円山応立、中島来章、さらには南画の日根対山にも師事して画域を深め、しばしば台覧に供し、推されて万国博にもたびたび出品した。また、生涯を通じて、生徒の書・画の教科を受け持った。

一方、京都遊学の折、頼山陽門下の宮原節庵に漢学・詩文・書を学び、帰阪の後さらに山陽の高弟後藤松陰に就いて学び、「山陽の孫弟子」を自任した。折しも、父重敬が開いた中之島の家塾を父の姉小路家出仕により花蹊が独力で経営することになる。花蹊ようやく二〇歳であった。

### 3 尊王攘夷の嵐

花蹊の父、重敬が黒船来航を機に、朝幕間が一気に緊張の度を高めた尊王攘夷の最中、尊王派公家の若大将とも目されていた、姉小路公知卿に出仕することになったのには、それなりの縁故があった。

木津の跡見家の寺、唯専寺と近隣の願泉寺は寺同士の仲で、その奥方は京の公卿石山家から入つた方という。重敬は折から由緒ある家柄もわずかに寺子屋と村役の書記で生活をたてていた。その中祖の迹見赤橋は聖徳太子に仕えて、法敵物部守屋を討つて、その功により、河内の遺領一万頃を拝領し河内に住んだともいう。母方の寺田家もまた、跡見家と遠祖、中祖を一つにする同族の系図をもち、両家は相互に婚姻関係を結ぶことがあつたという。寺田家出身の母は幼い花蹊に語つて「先祖を穢すな」と教えたという。

願泉寺の縁で姉小路家に奉公した姉藤野が、公知卿の奥向きに仕えて、一子公義君を儲けたことにより、里方の父重敬の出仕を求めたのであつたろう。安政六年（一八五九）八月の「約定の事」には、「已後御用之節勿論非常等早速参殿可有之候」とある。やがて、重敬は外戚として、緊迫した幕末の政争の表舞台に立ち会うこととなる。

文久二年（一八六二）十月十二日、朝廷が將軍家茂に「攘夷督促の詔」を授ける勅使に「正使三条実美卿、副使姉小路公知卿」として遣わした。花蹊の父は「目付」、弟重威は「近習」として土佐

藩兵三〇〇が警固する行列の中にあつた。三条公は同じく、長州兵を従えて東下した。攘夷実行の事は幕府に時間を与えたことになるが、勅使待遇に当つての旧慣を改めさせる成果を挙げて、暮れに無事帰任した。

文久三年（一八六三）四月十三日には、公知卿が摂海巡檢の任を命ぜられて、重敬らを従えて大阪に陣して、幕臣勝海舟に「海防の意見」を問ひ、翌日には幕艦「順動丸」に乗つて大阪湾の防備を巡視した。また、公知卿は折しも、大阪城中に在つた將軍家茂公との会見もあつた。

（五月）廿四日 此日昼前時、京師より店走りにて文来。殿様御事、廿日之夜四ツ時、御所より御退出懸、朔平御門の廻り懸にて、浪人物三人、面を包、<sup>（後）</sup>うしろはち巻にたすきかけにて、向より御胸を切付、此きつ長六寸深<sup>（傷）</sup>サ四寸計、殿様、太刀ヲ〜と四度も仰せられ候へとも……（『花蹊日記』文久三年）

賊徒に御所下がりやを朔平門近くで襲われて遂に

翌日亡くなられた——公知卿暗殺事件の早飛脚便だつた。昨日京都の知人よりの知らせで「びつくりわつと泣く計也」と書きつけた、その詳細の便であつた。公知卿御歳弱冠二五歳であつた。

朝廷は公知卿に「参議左近衛権中將」を贈つてその殉難を悼み、犯人の探索を命じ、嫌疑者が挙がつたが証拠不十分のまま自刃、真相は不明のままであつた。花蹊は後年、幕末維新時の略年譜を認め、頭註して「国事掛日下玄瑞・武市半平太・照旗烈三郎ら有志と交はる」と書き残した。

慶応三年（一八六七）十二月「王政復古令」により、先の公武合体派クーデターで、長州に追放されていた、三条実美卿らが帰京。早速、新政府の要職に就き、公知卿亡き後、久方振りの朗報であつた。一族の勤皇の大義もようやく日の目を見ることができたのであつた。

#### 4 花蹊の上京

主君姉小路卿の不慮の死をはじめ、王城の地京都は尊王だ攘夷だと田舎侍や浪士の横行、さては戦争騒ぎまで勃発。折から花蹊一家の分散を氣遣つた主家の命で、やむなく先祖所縁<sup>ゆかり</sup>の木津を捨て

て上京した母は、慣れぬ老女代りの御殿勤めなど

もあり、ふとした風邪で不帰の客となった。明治二年（一八六九）六月七日のことで、「実に一生涯のなげき涙雨のごとし」と花蹊は日記に書きつけた。

慶応二年（一八六六）三月、主君の千重丸君は元服して公義きんよしと名乗り、先帝の崩御、新帝御踐祚の明治三年「御用召」とて、重敬らを従えて東上する。明治三年八月のことだった。ついで暮れ近い、十一月十七日には花蹊もまた父たちの後を追って東都入りをし、築地の沢家にひとまず落ち着く。

花蹊はさっそく、旧主の盟兄三条様を訪問、「久々にて拜謁種々御物語申し上げる。三条様より御依頼の御襖四季花卉揮毫にかかる。また、方々様より御たのみの揮毫ものにていそがし」と誌している。にわかには東上した公家の依頼ばかりか、朝廷や外務省さては渡日の外国人への御土産揮毫もあって、「揮毫もの夥しく繁忙を極む」と洩らすほどであった。

その頃「令嬢とも云ふべき人は開化ととなへて髪をザン切にして長き書生羽織を着、エン筆を耳に挟んで、ヘコ帯などして実に殺風景を極む。予この風体をみて是を一変せねばと考ふ、女子教育

の念強し」と書き込む。

明治八年（一八七五）一月の「跡見学校」開校までの数葉の略年表は皇居や青山御所での御前揮毫の榮譽のこと、京都時代の公家の姫君の入門のこゝと「萬里小路音丸、伴子、李子など」「入門する華族の姫たち八十余名に達す。日々入門を乞ふ者織るが如し」などと書き、「姉小路の家屋拝借いたしても居られずとて、神田中猿楽町十三番地の所に買約す」で、いよいよ開学構想が具体化する。

かくて、周知の開学当日の記事になるのであるが、入塾の児女達は、京都時代の公家の縁か、尊攘派公卿に近かった藩公たちの類縁の姫たちが多かった。とすれば「京風」こそが「雅び」の原型だったろう。

維新により、にわか東京住まいで、東西も判らず、ましてや児女の訓育など思いの外最中、花蹊の塾ともあれば、有無を言わずに、聞き伝えて集まったものであろう。

明治六年（一八七三）、「中山従一位様より御頼み」とて、仲子様御寄宿のことがあった。明治天皇の御従兄で天誅組てんしゅうぐみの大将として挙兵、敗れて長州に落ちた忠光の遺児南加みなかの入塾だった。花蹊に



とつては河内在の従兄弟二人がその拳に際し、一人は主君に殉じて京六角獄に斃れ、一人は詮議最中に憤死する因縁の出会いだった。明治九年（一八七六）には、その仲子を、明治天皇にお引き合わせをするということで、花蹊を介添えとして、書画を合作することがあった。

## 5 女教院

明治三年（一八七〇）「大教宣布の詔」が出され「大教」の名で、天皇の宗教的権威に基づく「神道的な国体観念・国民道徳」に則る国民の教化政策が打ち出された。明治五年三月には教部省を設置して、国民教化の教則三条「敬神愛国、天理人道、皇上奉戴・朝旨遵守」を定め、東京に大教院、地方に中小教院を設置し、教導職を任命して教化に当たらせた。

明治六年五月十三日の『花蹊日記』に「教部省へ出頭。補権訓導拝命……夫ヨリ芝大教院へ出頭ス、三ヶ条令旨給候也」とあり、次いで二十七日「良姫さま、撰斎、花蹊、教部省出頭、補大講義拝命……局長ヨリ私へ相頼まれ候女教院御取立ニ付、女教師人選可致様トノ事也。」

大教院は明治五年（一八七二）五月、仏教各派の本山連合の建白で、教導職養成機関として設けられたものである。また、女教院は女子の教導職養成機関として設立企画がなされ、その女教師人選を花蹊が委嘱されたことになる。その女教院の代表として、故姉小路公知卿の妹良姫が迎えられ、花蹊がその後見を、姉弟も補佐することになった。折しも良姫は皇后入内とともに女官藤袴としてお仕えし、大講義の位階については皇后の意向もあった。拝命の翌六月には花蹊らは良姫を擁して、「女教院開講祭典」を挙げ、毎月三と八の日に、姉小路邸の一画で女教集会を行い、教部省幹部の井上頼圀や渡辺重石丸による、『古事記』・『日本書紀』など神典の講読や、祝詞・説教などの祭儀の習得、また街頭での説教会なども行つて懸命であった。

こうして一年後の明治七年（一八七四）五月二十三日には良姫を齋主に「女教院開校祭典」を挙行し、「女教職順序拝礼…花蹊門人惣拝ス」として十数名の女教師名が記載されていて、花蹊はその責を果たした。

ところが……

明治八年（一八七五）二月三日の「朝野新聞」に突如「教部省権訓導跡見花蹊辞表の写」が載った。

「一月三十一日付で教部大輔 宍戸璣宛」である。

花蹊は「権訓導の重任は千古の特典」と恐縮しながら、「多忙」「多病」の故、辞職を願いだしたのであつた。絵事の繁忙、女教のこともこの一月八日には「跡見学校の開学」のこともあり、超繁忙はともかく、多病は解せない日常だつた。案の定、

花蹊の辞意の理由は、実はすでに教部省下の大教院体制が崩壊寸前であつたのである。当初「大教宣布」を神仏合同布教で推進するはずのところ、神道の突出に仏教特に真宗側からの分離建白書提出などの騒ぎに発展し、結局、大教院は明治八年

五月三日をもつて解散となる。その直前一月末日の辞表であつた。

かくて花蹊は改めて、跡見学校の始業式を十一月二十六日に「女教院開校祭典」に倣つて神式で挙行した。「八意やじつ思兼神おもいかねのかみ」の祭壇を前に、花蹊の祝詞、盛装した女生徒の神饌奉仕などを通して「敬神愛国」の情操を培つた。

## 花蹊——尊攘派女志士

若き日の花蹊伝を確認しようとするれば、幕末

維新史の生々しい裏面史に否応なしに遭遇する。

「太平の眠りをさます上喜撰たつた四杯で夜もねられず」——折からの黒船騒ぎを発端に、朝廷・幕府・在野志士が三巴に組んずほぐれつといわゆる尊王攘夷の抗争を展開したなかにあつ

て、花蹊一族の殿様姉小路卿は尊攘激派の若大将として、西国雄藩の国事係の司令塔的な役割を担つていた。

花蹊は自筆『花蹊略歴』の中で「陛下加茂行幸仰せ出されたり」とか、「国事係久坂玄瑞、竹市半平太、照旗烈三郎ら国士と交る」などと記している。

その長州の久坂らは「和宮」の江戸下りの行

列を阻止しようと提議して未遂に終わっている。

その行列の中に、もしかしたら、花蹊も随従したかも知れなかった。お家の殿様、姉小路卿は和宮降嫁に絶対反対の急先鋒であった。花蹊の江戸行きを承知する訳にはいかなかった。

翌文久二年には、正使三条実美卿、副使姉小路公知卿が「攘夷督促の別勅使」として江戸城に將軍を謁見して朝命を伝え、一応の成果を挙げて帰任した。

文久三年五月二十日、姉小路卿が御所退出の折、凶刃に斃れる異変があり、跡見一家はもちろん、尊攘派公卿・志士にとつても一大打撃であった。

さらに八月には、公武合体派公卿のクーデタ

によって、三条実美卿ら七名の尊攘派公卿の

西国追放のことがあり、花蹊にとつて決定的な打撃になる。翌年の八月には長州藩兵による御所・京都市中の親幕府勢の追放を企てた交戦があり、焼野原になった京都町民にはかえって快哉を浴びた。『花蹊略歴』は当時の俗謡「土さん加こさん会津はいやよ会津いなしてよい毛利よんでくれ」を絵入りで記すが、花蹊の真情躍如というべきであろう。かくて花蹊の長州びいきは生涯にわたった。

大君の御心いかにおはすらむ

をみなかしこさわかみなるかも

女なりとも勤皇にかはりあらむやと、人には言はじた、知るこの日記（『女子習字帖』）

